

12/7 朝日



来年もあきらめない 年内最後の大規模抗議

戦後70年の今年、安全保障法制に反対し続けた学生や学者らが6日、年内最後の大規模な抗議行動を東京・銀座周辺で展開した。デモ行進もあり、参加者約4500人（主催者発表）が「民主主義ってなんだ」などと声を上げながら、冬空の下を練り歩いた。▼35面「民主主義問う学生団体「SEALDs」と「安全保障関連法に反対する学者の会」が主催。学生や高齢者、家族連れ、野党国会議員ら、さまざまな人が参加した。日比谷野外音楽堂であった集会には、俳優の石田純一さんも駆けつけて登壇。「一人ひとりには大きな力はない。でも若い人が、なぜ今、戦後の歩みを変える必要があるのか、と声を上げてくれた」と話した。

デモに参加した千葉県市川市の団体職員、保田諭子さん（38）は「当たり前と思っていたことが崩れていく危機感を感じた1年だった。でも、周りの人とこれほど議論し、思いを共有できた年もない。来年につなげたい」と話した。

（市川美亜子、後藤遼太、写真は関田航）

デジタル版に動画

民主主義 問い続ける

今年最後反安保デモ

戦後70年の今年、安全保障関連法制に反対する若者の動きは、世代や立場を超えたうねりを起した。6日、その中心となった「SEALDs」が東京で年内最後の大規模な抗議行動を開催。「民主主義ってなんだ」。日本各地から人々が集まり、声を上げた。

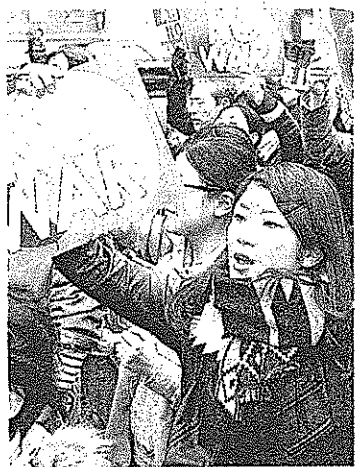
▼1面参照

「自分にできることを」

東京・銀座でのデモの中心には、シールズのメンバーがいた。その一人、筑波大大学院1年の諏訪原健さん(23)は集会で「安保法案は止まらなかつたけど、社会は変わっている。大きな希望がある」と訴えた。街頭デモに加わり始めたのは昨年2月。後にシールズの中心メンバーになる奥田愛基さん(28)宅に遊びに行ったのがきっかけだった。奥田さんは「自分たちのやり方で声を上げよう」と語った。

今年5月、奥田さんと諏訪原さんは十数人でシールズを結成。国会前のデモ参加者は安保法案審議が進むにつれて増え、8月30日には12万人(主催者発表)に人波に圧倒されながら思った。「この国に良心はある」。6日のデモには、関西学院大2年の鈴木詩穂さん(19)も兵庫県西宮市から、「シールズ関西」のメンバーも駆けつけた。

鈴木さんは福島県会津若松市出身。中学校の卒業式当日に東日本大震災が起きた。翌日には東京電力福島第一原発で水素爆発が起きた。その2日後に三重県の親戚宅に避難。「世界で起



デモに参加し、声を上げる鈴木詩穂さん=東京・銀座

■安保法制をめぐる主な経緯と抗議行動

5月3日	東京の大学生ら十数人が安保法制反対のグループ「自由と民主主義のための学生緊急行動(SEALDs=シールズ)」結成。関西でも「SEALDs KANSAI」結成
26日	安保関連法案が衆院本会議で審議入り
6月4日	衆院憲法審査会で憲法学者3人が法案は違憲と指摘
5日	SEALDs、国会前で初の抗議行動。毎週金曜日に集まるように
7月15日	衆院特別委が法案の採決を強行、可決
16日	衆院本会議で法案可決
8月2日	高校生グループ「T-ns(ティーンズ)SOWL(ソウル)」が東京・渋谷で初のデモ
30日	国会前で12万人参加(主催者発表)の大規模デモ
9月15日	参院中央公聴会の公述人としてSEALDs中心メンバーの奥田愛基さん出席
17日	参院特別委が法案の採決を強行、可決
19日	未明に参院本会議で関連法成立
10月19日	成立1カ月の節目に国会周辺でデモ。毎月19日のデモが続く

問題点を伝えても、部活やバイトを理由に行動に移す人は少ない。「政治家になる覚悟がないのに不満を言うことを続けた」

「熱は冷めていなかっただ」

きることはずべて、いつ自分に起きてもおかしくない。日常は簡単に壊れる」と考えるようになった。今年5月、友達に誘われてシールズ関西のミーティングに参加した。「デモって自分の主張しかしないし、意味あるのかな」と最初は疑問を持っていた。だがメンバーと話すうち、政治に対して意思表示する場は選挙だけではない、と思うようになった。安保法案の審議が大詰めを迎えた9月中旬は、国会前と大阪を歩き回って声を上げた。大学の友達に安保法制の



高木野衣さん

デモ行進に先立ち日比谷野外音楽堂であった集会には、京都弁護士会所属の高木野衣弁護士(28)も京都府にも参加した。

2013年12月、弁護士登録15年以内の若手が紙芝居や語りを通じて憲法を伝える「明日の自由を守る若手弁護士の会」に入っ

うのはおかし」と言われたこともある。「なんで来年も再来年も、部活やバイトに行く日當がずっと続く前提でいられるんだろ」。周囲との温度差に戸惑った。でも、シールズの影響を受けた多くの人たちが声を上げた。「めっちゃめっちゃ遠い存在だった」政治に影響を与えられる可能性も感じた。目標は来夏の参院選へ。「成立しても使えない法律はたくさんある。自分にできることを続けた」

摘する中、従来の憲法解釈を変えて集団的自衛権の行使を容認した点に憤る。「憲法改正の手續きを取り、主権者である国民が選ぶべきことです」。この1年、地域の団体の依頼を受け、憲法の成り立ちや安保法制を解説する学習会を仕事後や休日に続けてきた。

この日、満員の集会場を見て思った。「熱は冷めていなかった。今後も学習会を続け、違憲訴訟の動きがあれば関わってきたいという。(鈴木詩穂、後藤泰太)

「民主主義が進化」

今年、学生や学者、市民が一緒に、街で声を上げた意味を識者に聞いた。

憲法学者の樋口陽一・東大名誉教授は「『公』の事柄に関心を持つことを敬遠してきた日本社会が大きく変わった。中心にいたのは『私』を大事にする若者だ」と話した。

政治学者の宇野重規・東大社会科学研究所教授は「日本の民主主義が大きく進化したのは間違いない」とみる。一方で「野党の側は、問題意識を深め、政策や政党のあり方に生かす動きには至っていない」と話した。

12/17 朝日

「おかし」と思いついた「多くの法律家が違憲と指

安全保障法制に反対する集会で、演壇に向かつて声をあげる参加者たち(16日午後、東京都千代田区の日比谷野外音楽堂、仙波理撮影)